



被災地の外国人が直面する言葉の壁をどう克服したらいいのか。被災地のフィリピン人の生活支援を続ける非政府組織（NGO）「フィリピン・ソサエティ・ジャパン」のネストール・プノ代表（西に聞いた。（聞き手・林勝）被災地では、言葉の壁に不安を募らせた外国人が多数いた。日本人に意思が伝わらず、つらい目に遭った人がいる。福島県沿岸で被災した貨物船のフィリピン人船員二十

被災フィリピン人支援団体

ネストール・プノ代表

外国人への支援 — NGOに聞く

人は、海上保安庁に救助されて一時的に同県いわき市のホテルに避難した。しかし、周りの日本人被災者とのコミュニケーションがうまくいかず、食料や水を受け取る

フィリピン人の安否確認を始めていた私たちの団体にインターネットで情報を送った。それを基に大使館を通して居場所を確認し、全員を外国人被災者の避難所となった都

る彼らでさえ理解できず、そのことがきっかけで遠慮がちになってしまった。日本人も自分のことで精いっぱいだったこともあるだろう。差別があるわけでもないのに、ちょっとした意思疎通の行き違いが悲劇を生むことがある。

防災用語を簡単に

— 日本で何年も生活している外国人なら大丈夫か。

— 「避難勧告」など、日本人が聞いてもとっさの行動に移しにくい防災用語もある。

機会を逃してしまった。結果的に数日間を飲まず食わずで過ごし、病気になる人もいた。

内の教会に移すことができた。— 食料ぐらい簡単に受け取れそうなのがするが。

— その後、どうなったのか。船員の一人が携帯電話で本国の家族に連絡を取った。家族はフィ

ホテルで日本人から「食べ物かどれだけほしいか」と呼び掛けはあったようだ。でも、英語ができ

災害時は言葉の壁が高くなる。私は日本で十三年間暮らし、日本語が話せる方だが、今回のフィリピン人支援活動では「支援物資」や仮設住宅の「仮設」「被災証明書」「一時金」などの知らない単語

行政やメディアには、もっと分かりやすい日本語を使う配慮や、簡単に説明できる伝え方を工夫してほしい。被災地の外国人は孤立しがちなので、通訳の大切さを多くの人に知ってもらいたい。

避難住民の声 教訓に

10月中旬の屋下がり、福島県会津若松市の仮設住宅にある集会所を熱弁が飛び交った。「やっぱり原発は危険だった。今回の事故で身に染みて分かった」「そちらも廃炉にした方がいい」

集まった住民たちの声に耳を傾け時にペンを走らすのは、静岡や新潟など全国各地

の原発立地自治体の関係者たち。原発事故で故郷を追われた福島県大熊町民に直接話を聞こうと、仮設住宅まで足を運んだのだ。

瑞さん一家からは、仕事の光一さんに代わり、幸さんが出席した。

「うちの町は除染して住民を帰還させる方針を持っていると聞くが、重要な判断は住民の生の声をもっと聞いてほしい」。9月の一時帰宅で、町へ戻って住むのは無理だと判断した経験から、現状の不満を率直

原発1キロからの避難
いつの日か

—19—

に発言した。「あれほど高線量だった町が、除染した程度で住めるとは思えない」

「考えさせられました」「勉強不足でした」。幸さんら大熊町民の切実な訴えに、立地自治体の関係者は表情を引き締めて帰って行った。

多くの住民が参加できなかった平日の防災訓練、大渋滞した避難の道、そして疑うことさえしなかった原発の存在……。いま思い返せば反省点はたくさんある。「目の前

の生活に追われていますが、全国にもっと教訓が伝わってほしい」

集会場に集まった仲間の町民を見て、幸さんは少しだけ心が軽くなった。

瑞（はなわ）さん一家 原発事故で大熊町から避難。光一さん(43)と妻幸さん(44)、次女沙也加さん(15)は愛知県豊田市で暮らし、会津若松市の仮設住宅に移った。長女梨奈さん(19)は東京で大学生生活。